

■殿様日記 vol.7 「衣紋納めと牧野家のお正月飾り」

平成27年 如月

私は現在、^{えもんどう}衣紋道研究会の会長をしている。衣紋道研究会では毎年、年初に衣紋始め、年末に衣紋納めを行っている。衣紋始めは新年にあたり今年も衣紋道の技術が上達します様にと、衣紋の神様をお祭りし装束をお供えして、この1年安全に無事に過ごせますようにと願うのである。その後、会員の前で着装披露を行う。衣紋納めでは神事は無く、この1年の着装技術の成果を会員同士で確かめ合う形で、男子・女子の会員がそれぞれ着装を行う。

装束を着装する人を^{えもんじゃ}衣紋者と言い、男女それぞれ2名ずつ前と後ろに分かれて担当する。装束を着装してもらう人を^{かた}お方と言い、昨年の12月13日、東京霞が関にある（一社）霞会館において、この衣紋納めの男女のお方を私と家内が務めた。普段は男女の会員の中からお方を選んでいるが、夫婦そろってお方を務めるのは非常に珍しいとの事であった。



お方を務めた牧野夫妻



女子装束のうしろ姿

平成27年1月6日から31日まで、長岡市立科学博物館において、「長岡藩主牧野家ゆかりのお正月展」と題して特別展を開催した。

私は大学を卒業するまで、京都で両親と共に生活しており、毎年暮れにはお座敷のお正月飾りを行っていた。お正月にふさわしいおめでたい三幅対の掛け軸の画題は、中央が「寿老人」右が「鶴と梅」左が「鶴と竹」である。寿老人は言うまでも無く七福神の一人で長寿を授けてくれると言われている。今回の三幅対の掛け軸は、床の間の幅が広くなければ掛けられないので、京都以来約30年ぶりに三幅そろって飾る事が出来た。

我が家のお鏡さん（鏡餅）は白色の陶製で中が空洞になっており、中には懐紙で包んだ新米を入れる。

近年は金峯神社の神事、王神祭で頂いたお米を使わ

せて頂いている。三ッ柏紋の黒漆塗りのお三方に奉書紙を敷き、うらじろ二枚とゆずり葉を置き、その上



牧野家のお鏡さん

にお鏡さんを置いて 橙 を載せる。前方には赤い布で出来た伊勢エビを立て掛けて床の間に置く。これらのお飾りは一夜飾りは良くないので、12月30日までにはすべて終わっていかなくてはならなかった。今回の展示では12月26日にこの作業を含めてすべて終了した。



『特別展 長岡藩主牧野家ゆかりのお正月展』展示の様子。

三幅対の掛け軸は、江戸幕府の御用絵師 狩野雅信が描いたもの。

他の展示品ではお正月用の黒漆三ッ柏紋^{すず}椀、錫製三ッ柏紋屠蘇器^{とそき}、朱漆三ッ柏盃など、我が家でお正月に使用している品々を展示した。(おかげで今年の我が家のお正月は実に寂しい器でお雑煮、お屠蘇^{とそ}を頂く事となった)

今回のこれらの展示は京都、長岡でも初めての事である。

また、これも初めて披露することになったが、江戸時代の終わりごろに記述されたと思われる「正月式書」^{しょうがつしきがき}も展示した。牧野家の江戸藩邸で行われていたお正月行事が書かれており、「歳暮祝儀として、殿様から干鯛を奥様、御新造様^{ごしんぞう}、御姫様へ・・・」など12月25日から翌年1月17日までが記されている。



牧野家の家紋「丸に三ッ柏」が入った漆塗りのお椀と「正月式書」(下段中央)

例えば元旦の食事などを紹介すると、

(手洗い) 御祝御手水^{ちようず}、(食事) 蓬菜^{ほうらい}、梅干、大福^{ふくでもち}、福手餅^{ひきわたし}、御引渡^{ぞうに}、御雑煮、御吸物^{すいもの}、(お酒) 御土器三方^{かわらけさんぼう}、長柄御銚子^{ながえ ちようし}、御加提^{くわえのちようし}、(食事) 数の子^{す ごぼう}、酢牛蒡、つづいて、(食事) 御高盛^{たかもり}、二ノ膳^{さしみ}、御刺身^{はち}、御鉢^{ぼん}、・・・

などと記されている。皆様のお正月料理と比べてみていかがでしょうか。

この「正月式書」は分かりやすく現代文になおし、ふりがなも付けた解説シートとして展示室に置き、ご来館のお客様から展示品と併せてご覧いただいた。

今回の特別展は1月末で終了してしまっただが、興味のある方はぜひ当館にお問い合わせいただき、お手に取ってゆっくりと読んでいただければ面白いと思う。